

2022年3月9日

各 位

移住者を呼び込む「神の島」大三島

～移住者を起点とした、観光・移住需要の創出～

株式会社いよぎん地域経済研究センター（略称IRC、社長 重松 栄治）では、このたび標記の調査結果を取りまとめましたので、その概要をお知らせします。

なお、詳細は2022年4月1日発行の「IRC Monthly」2022年4月号に掲載予定です。

記

【調査概要】

- ・ 今治市は、2022年版「住みたい田舎ランキング」で、子育て・シルバー部門の全国1位に選ばれた。同市の中でも大三島は、起業を目的とした移住者の割合が突出して高い。
- ・ 23人の移住者に取材したところ、大三島の魅力は、「豊かな自然と利便性のバランス」「豊富な観光資源」「移住者を受け入れる土壌」であると考えられる。
- ・ 地域おこし協力隊や今治市職員などが紡いだ人と人のつながりが、ここ10数年、魅力あふれる「神の島」に多くの移住者を呼び込む流れを生んでいる。
- ・ 近年、移住者たちはさまざまな分野で活躍の幅を広げている。飲食店を開業して観光客を呼び込んだり、お試し移住ができる施設を運営することで新たな移住者を呼び込んだりしている。
- ・ 移住者の多くは、地元住民や先輩移住者、地域おこし協力隊や行政から親身なアドバイスやもてなしを受けるなかで、居心地の良い大三島に住み続けたい気持ちが高まる。こうした地域に対する愛着を育んだ移住者たちを起点に、観光・移住需要を創出する好循環が生まれ、社会課題に立ち向かう下地が整いつつある。

以 上

【本件に関するお問い合わせ】 株式会社いよぎん地域経済研究センター（担当：西田） TEL (089) 931-9705

はじめに

近年、地方移住への関心が高まるなか、今治市は、2022年版「住みたい田舎ランキング」※で、全国1位に選ばれた。この今治市の中でも、移住者を起点とした地域おこしが注目されている、大三島にスポットを当て調査した。

※人口5～20万人のまちランキングで、今治市は子育て世代部門とシニア世代部門で住みたいまち1位を獲得（宝島社『田舎暮らしの本』2月号、「2022年住みたい田舎ベストランキング」）

1. 過疎地域に共通する社会課題

大三島は、急激な人口減少によって、過疎地域に共通する社会課題を多く抱えている。

大三島が抱える主な社会課題

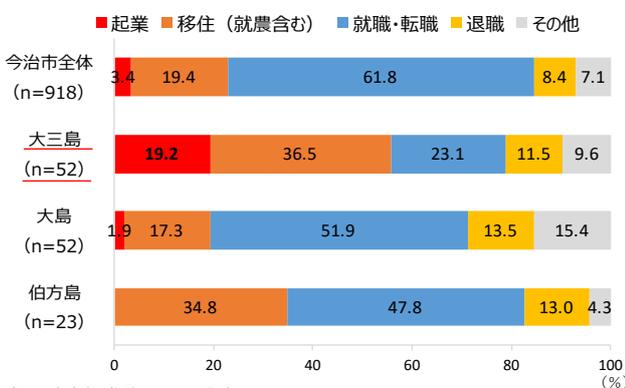
- ①人口減少：直近30年で人口が半減
- ②高齢化：住民の半数が65歳以上
- ③農業の衰退：直近15年で農家数が半減
- ④学校の存続：今治北高校大三島分校の存続危機
- ⑤住居の管理：市場に出回らない空き家の増加

2. 起業・移住したくなる魅力

(1) 大三島への移住目的の特徴

大三島への転入理由の内訳をみると、「起業」の割合が高く、今治市全体や近隣の大島、伯方島と比較すると、突出している（図表-1）。

図表-1 地域別にみた転入理由の内訳（2020年）



資料：今治市の集計をもとにIRC作成

注：転入手続き時のアンケート調査の回答を集計したもの

今治市によると、21年の市全体への移住者は、前年比で1.7倍の約1,600人となった。大三島へ

の移住者も、前年比1.5倍の約80人となるなど起業・移住したくなる魅力があるようだ。

(2) 起業・移住したくなる魅力の正体

では、その魅力とは何だろうか。大三島に移住した23人に対して、移住先に大三島を選んだ理由や魅力を取材したところ、複数の要素で構成されていることが分かった。

ここでは、起業・移住したくなる魅力の正体を3つの項目で明らかにする。

①豊かな自然と利便性のバランス

しまなみ海道沿線の島で、最大の面積を誇る大三島は、海と山の両方の自然の魅力を持している。

海を見渡せば、目の前に大小さまざまな島や雄大な橋の景色が広がる。山に入ると、人の開発が加わっていない、あるがままの自然を楽しめる。

そして島には、スーパー（3店）やコンビニ（2店）、病院、図書館、教育機関（保育園から高校まで）などの施設があり、暮らしに不便さを感じることはほとんどないという。車で橋を渡れば、今治や尾道の中心部に30分でアクセス可能で、路線バスも充実している。

このように大三島は、島ならではの豊かな自然と生活利便性のバランスがとれた生活しやすい場所だと言える。

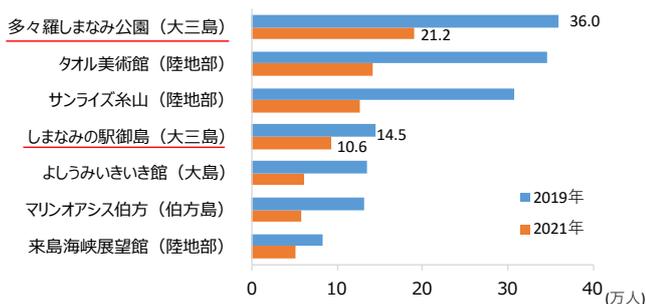
②豊富な観光資源

大三島は、全国に1万社以上の分社を持つ大山祇神社がある「神の島」として古くから知られ、多くの参拝客が訪れる。また、世界的建築家である伊東豊雄氏の活動を紹介する「今治市伊東豊雄建築ミュージアム」、「ところミュージアム」など5つのミュージアムを有するアートの島でもある。

世界的にも有名なしまなみ海道を訪れるサイクリストも大幅に増えた。レンタサイクルの貸出実績をみると、2017年は15万台と、10年間で約4倍に伸びた。2年に1度開催される国際大会「サイクリングしまなみ」など、行政のサイクリング施策が功を奏している。

大三島と今治市の他地域の観光客数を比較すると、大三島の道の駅「多々羅しまなみ公園」と「しまなみの駅御島」は、観光客数が多い施設の上位にある（図表-2）。大三島が有する観光資源の魅力の高さがうかがえる。観光客向けの生業なりわいを考える人にとっては、チャンスがある島といえるだろう。

図表-2 今治市観光施設における観光客数（上位抜粋）



資料：愛媛県「主要観光施設入込状況」をもとにIRC作成

③移住者を受け入れる土壌

大三島は、「神の島」と呼ばれるだけあって、島全体での秋祭りだけでなく、集落ごとに行う多くの祭事がある。ことあるごとに住民が集まり、盃を交わすことで交流を深めてきた。移住者が「住むと愛着が生まれて、離れたたくなる場所」と口をそろえる背景には、こうした深い交流がある。

後述するが、ここ 10 数年の間で移住者が増えてきたため、地元住民も移住者の受け入れにも慣れている。「移住者が生業を通じて、島を盛り上げるのは大歓迎」「地域の祭りが復活して嬉しい」との歓迎する声もあった。

こうした移住者を受け入れる土壌を育んだのは、移住希望者からも頼りにされる多くの先輩移住者だ。

3. 移住者が増えてきた要因

～人と人のつながりが移住者を呼び込む～

複数の関係者によると、大三島への移住者はここ 10 数年で増えてきたようだ。その要因を 4 つ

示す。移住者と受け入れに関わる人たちが紡いだ人と人のつながりが、魅力あふれる「神の島」に多くの移住者を呼び込む流れを生んでいる。

①地域おこし協力隊の導入・定着

今治市に地域おこし協力隊制度が導入されたのは 2012 年。隊員は自ら地域の課題を設定し、3 年間の任期で精力的に地域おこし活動を行ってきた。彼らの活動で地域が活気づいていくなかで、よそものである移住者と地元住民の関係も深まっていったという。

こうした状況を裏付けるのは、任期終了後の地域おこし協力隊の定住率だ。全国の定住率は 50% 程度※だが、大三島（11 人）は 90% 以上だ。行政が隊員に寄り添い、地元住民が温かく受け入れたこともあって、多くの方が地域に自らの居場所や生業をつくり、定住し続けている。

※活動地と同一市町村内に定住した割合

②移住者に寄り添った今治市職員の対応

地域おこし協力隊の定住率が高い背景には、今治市職員のサポートがある。隊員のモチベーションを持続させるためにも、週に 1 度は雑談の機会を確保するよう心掛けているという。隊員からは、「入隊の日に、職員の方が温かくもてなしてくれた」、「任期中もよく声をかけてもらい、ありがたい」との声があった。

近年、全国的に地方移住への関心が高まるなか、今治市も移住政策に注力した。移住希望者に寄り添った移住相談会や手厚い住宅補助を行っている。今治タオルやしまなみ海道の高い認知度と、市の取り組みが奏功し、移住者は前年比で 1.5 倍となった。

③ラントゥーレーベン大三島でのお試し移住

旧大三島町は 2003 年、地域の農業振興や定住促進を目的に、「ラントゥーレーベン大三島」（ラントゥーレーベン＝ドイツ語で田舎暮らし・田舎生活の意味）を設立した。

同施設は、年間 30～45 万円程度の安価な使用料で、農園つきの 1DK～2LDK の物件だ。地域の農

家の方々から農業指導が受けられ、最大5年間のお試し移住ができる。

ラントゥーレーベンの管理組合は、餅つき大会や忘年会などの行事を開催しており、「住民と交流できて楽しい」と利用者の評判も良い。これまでの利用者82名のうち、約3分の1が大三島に定住している。

④相談窓口を担う移住者

移住者の中には、受け入れてくれた地域への恩返しとして、新たな移住者に対する相談窓口の役目を担う人もいる。「ゲストハウスのオーナーに、地元の人をたくさん紹介してもらった」、「住む物件をいくつも提案してもらった」との声があった。そうした人の温かさに触れて、移住を実行する人も少なくないという。

大三島ではこれらの要因などが重なり合い、多くの移住者を呼び込む流れが生まれている。

4. 起業・移住者たちの活躍

大三島への起業・移住者（一部Uターン移住も含む）たちは、近年、さまざまな分野で活躍の幅を広げている。

（1）飲食店の約半数が移住者の経営店舗

大三島にある飲食店の数は、2021年4月時点で48に上り、うち約半数は、移住者が経営する店舗である（ぐるぐる巡る大三島グルメマップ調べ/食事ができる旅館・民宿なども含む）。

大三島は、老舗の旅館や飲食店が、島の幸である海鮮を提供することで、神社への参拝客やサイクリストらをもてなしてきたという。近年は、フレンチやカフェ、ワインや地ビール、イノシシ料理などの移住者が経営する新規出店が増加し、観光客を呼び込んでいるようだ。コロナの影響があったにもかかわらず、最近でも移住者が開業した店が増えたことで、飲食店は増加している。

（2）移住者が移住希望者を呼び込む接点に

大三島には滞在型農園施設であるラントゥー

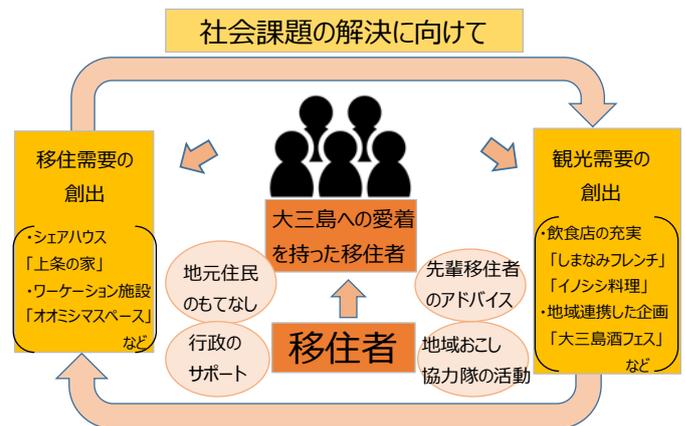
レーベンのほかにも、移住者が運営するシェアハウスやワーケーション施設などがある。こうした施設が新たな移住希望者を呼び込み、若い人材の移住につながっている。

5. まとめ

大三島への起業・移住者は、人生経験が豊富で実行力のある人が多い。自分の思い描く生業や生活を実現するために、この島を選び移住する。そのなかで、地元住民や先輩移住者、地域おこし協力隊や行政などの親身なアドバイスやもてなしを受けることも多い。住む物件を紹介してもらったり、野菜をもらったり、ビジネスに関する助言をうけたりする。こうして居心地の良い大三島に住み続けたい、何とか恩返しをしたいという気持ちが高まる人が多い。

大三島への愛着を育んだ移住者が営む飲食店や施設が、観光客や移住希望者の受け皿となり、新たな移住者の呼び込みにつながっている（図表-3）。

図表-3 大三島での観光・移住需要の好循環



観光資源にも恵まれた「神の島」では、移住者を起点とした好循環が生まれ、人口減少などの社会課題に立ち向かう下地が整いつつある。これからも新たな着想が次々に生まれる、活力ある地域に発展していくことを願う。

（西田 賢治）